

■第一章 「場」の社会史■

1 「場」の概念

本研究の中心的な概念である「場」という言葉について、まず検討しておこう。ごく日常的な語感からしても、この言葉にはどこか和風の匂いがつきまとう。「その場の雰囲気」を察する。「場をはずす」「場数をふむ」などなど。我々が今なおもち続けている、感受性の深いところにある琴線を刺激する言葉だ。このテーマが発想された背景にも、そういう深いレベルでの日本人の感受性の今日的な意義や機能を分析の射程に収めたいという意図があったものと思われる。その期待に込める意味からも、この「場」という言葉をめぐる歴史的な経緯から話を始めよう。

「場」という概念を社会科学的に最初に定式化したのは、おそらく中根千枝だろう。その主著『タテ社会の人間関係』で展開される議論はおおむねこういうものだ。

西欧で生まれた社会学理論をそのまま日本にあてはめ、そこからのみだした部分を日本の後進性としてしまう従来ありがちな日本社会学論は不毛で、日本の社会を分析するためには、あるいは日本とそれ以外の社会を公平に比較するためには、そのために独自に構築された理論的枠組が必要である。中根はその

く把握しているが、中根は「場」という生活空間の最も基本的な前提に言及していない。あるいは「場」という用語に含意させてしまっている。それは「各メンバーが空間的な近さを共有する関係にある」ということだ。これこそ「場」という概念そのものだが、その特性を考える上で最も前提となる要素だ。また、「資格による統合」が基礎となつて、インドの社会の「カースト」が違えばたとえ隣人でも結婚にいたることは決してない」といった特性と際だつた対照をなすものである。日本人にとって「場」とは「集住」することと密接な関連があり、後に述べる惣村共同体の特質と表裏一体の関係にある。

「タテ社会の人間関係」は一九六七年に書かれた論文で、昨今の日本の社会状況の変化にはもちろん言及していない。二十世紀の末に生きる我々からすると、やや「近過去」の分析という印象がある。このような日本人論も、ごく最近まで考えられていたように、日本人の常に一貫した特性ではなく、ある歴史的な条件のもとに現れた特性であるという視野が今となっては必要だろう。また、「場」の原型が江戸中期の惣村社会にあることは暗示しているものの、「場」という生活空間の生成過程についても詳しい分析をしていない。そのあたりを補いながら、「場」というものの社会史について考察してみよう。

ために「場」という概念装置を提示する。これは「資格」と対立する概念で、おおまかに言えば、「場」による統合が優位にあるのが日本の社会で、「資格」による統合が優位にあるのが西欧やインドの社会であるとされる。さらに、そのような日本的な「場」の例として、「村」や「家」や、戦後の日本の企業組織をあげ、「場」が今も我々の主要な生活空間であることを指摘した。

中根は、実は「場」の概念をコンパクトな表現で定式化してはいない。「資格」(社会学で言う「属性」とほぼ同義と解釈される)と対比することで間接的に表現しているだけにとどまっている。日本人同士のせい、それでも言わんとするところはよくわかる。中根の指摘する「場」という生活空間の特性は次のように整理されるだろう。

- ①付属物(本人の家族など)まで含めた全人格的帰属
 - ②単一帰属(複数の「場」に帰属することがない)
 - ③内部と外部の区別と両者の間のダブルスタンダード(二重規範)
 - ④内部の濃密な対人関係
 - ⑤内部に(帰属期間の)序列の重視(中根の言う「タテ社会」)
 - ⑥ルールよりメンバーの合意による行動制御
- 確かに我々の社会の各種の組織の特性をよ

2 惣村社会の成立と勤勉革命

広々とした水田の中に農家が点在するといった、我々が現在イメージする典型的な農村の姿は、実は比較的最近のものである。農業が大河川の下流の沖積平野に拡大されたのは、戦国武将による大規模な治水工事が始まり、さらに、江戸時代初期の幕藩大名による大開墾時代の後のものである。

それまでの農業は、より上流の山際の扇状地(山麓谷戸地)で行われていた。おのずと耕地面積は小規模で地味も悪かった。このため、同一耕地での連作には困難がともない、農民は長期的に見れば、定住民ではなかった。むしろ氏族集団を単位として転々と流浪する存在であった。ところが、群雄割拠の戦国時代に、領国の生産性を向上させる必要に迫られた戦国武将が盛んに治水工事をし、下流域に新田開発を行い、肥沃で開放的な空間に農業の拠点が移動した。また同時に、兵農分離が進み、純粋な職業集団としての「農民」が形成され、生産の単位も氏族集団から単一家族とその集合体である村落に再編成された。この動きは元禄(一六八八〜一七〇三)享保(一七一六〜一七三五)期まで続き、この間、爆発的に人口が増加した。新しいタイプの生産インフラは元禄・享保期までに整備され、行政的にもこの時期までに「村方三役」が制

度化されるなど、惣村社会は江戸中期までに明瞭な形をもつようになった。この惣村社会の特徴は、
①貢納に村が責任を負い（村請制）、領主は村内には不干渉（役人は城下に居住し村内には居住しない）
②村内／村間での紛争は話し合いで解決し、訴訟をしない
③宗門人別改帳による単一帰属の管理
④入会権など村有資産の明瞭化

など、このような「閉鎖的（①）」「安定的（②③）」な環境のもとで、氏族集団が解体し、生産単位としてイ意識が庶民の間にも生まれたとされる。一組の夫婦とその直系家族（すなわち現在我々がイメージする「家族」）が生産、消費の単位となり、このイ意識を糾合したものが上級の生産、消費の単位としてムラを構成するという、我々が現在イメージする惣村社会のモデルが完成したわけだ。本研究のテーマに関して重要なことは、この惣村社会の成立を背景に、「勤勉革命」が起きたとされる点である。中根の指摘する「場」の最も原初的にかつ典型的な形態が現れ、その中で積極的な労働の動機づけが生まれた。これは、西欧においてプロテスタントイイズムが禁欲的労働を動機づけたのと等価な社会現象と見てもいいだろう。勤勉に働く日本人というイメージは、この

が形成される
④それを背景に、ムラ空間に勤勉性についてこのようなメカニズムが動機革命を招いたと見るべきだろう。
また、この勤勉革命は、農村を中心に起きた現象であるが、それだけにとどまらず、全社会的現象であったと見る必要がある。当時の農業人口比率は八十%以上で、これだけでも全社会的現象と言っても差し支えないが、あえて補足するならば、武士階級にとつての「藩」や、商人にとつての「店」、職人にとつての同業仲間も惣村社会と同等の固定的な生活空間、すなわち中根の言う「場」だったと考えていいだろう。また元禄期は急速に都市化が進行した時期だが、勤勉革命を経験した農民が、離農、奉公という形で都市に流入したことも勤勉革命の拡散に貢献しただろう。その意味で勤勉革命は日本人全体が経験したこと、そのエッセンスは、人間が一つの社会関係―それぞれの「場」―に閉じ込められることであつた。
このような環境で勤勉革命が起きたわけだが、「場」の出現はその成員を動機づけるだけでなく、反対に自由な発想や行動を抑圧する作用ももっていたことを見逃すわけにはいかない。明治期の日本文学には惣村社会的なもの（たとえば「村内の身分差」）が、近代

時、惣村社会という新しい生活空間の中で誕生した。画期的な変化と言つていいだろう。「勤勉革命」という用語の考案者である経済史家の速水融はそのメカニズムを次のように解説する。「（元禄期までの）耕地規模の拡大が頭打ちとなり、（規模の拡大ではなく）効率の向上が収入向上の手段となり、また収入の向上はそのままイエの収入になるため、これがインセンティブとなって勤勉革命が起きた」（速水他編「経済社会の成立―十七、十八世紀―講座日本経済史第一巻／岩波書店」）。

しかし、社会的には、収入の向上がインセンティブとなるためには、豊かな暮らしが望ましいという観念が前提として必要で、それが明瞭な形を帯びていない前近代の社会では、収入の向上が期待できるといっただけでは勤勉革命は起きない。惣村社会の出現と勤勉革命との間にはもう少し別の因果関係があると考えらるべきだろう。それは次のように整理されるだろう。
①人間が一つの社会関係（たとえばムラ）に閉じ込められるという政治力学が働く
②その関係（ムラの一員という）を離れては生存さえ危ういということ軸にムラの中で安定した地位を保持したいという動機が形成される
③ムラの中での長期にわたる濃密な対人関係

的自我（たとえば「恋愛」）にとつて桎梏となつていゝというモチーフがしばしば取り上げられた。幕末期の勤皇の志士たちの多くが脱藩浪士だったのは、「藩」という強固な「場」の一員のままでは行動の自由が得られなかつたためである。「場」という生活空間は、その成員を動機づけると同時に、行動を規制したり、発想を抑圧する装置でもあつたのだ。このことは現在の時点で「場」というものを考えるうえでも見逃すことはできないことだ。

3 「場」という生活空間の変化

日本はこの惣村社会的な「場」を保持したまま、近代化の道を進むことになる。近代社会は自由に行動する個人を基本的な単位とし、ルールの共有によつて秩序を得る。明治以後の日本は、自由に組織を構築できるという意味では近代的であつても、その組織の内部の行動原則はかなり色濃く「場」に由来する性質のものを保持するといふ、いささか奇妙な近代社会となつた。しかし、例えば企業組織は、戦後の日本の企業組織に比べればかなり「非日本的」で、企業一家意識などというものは無縁のものが多かったことは『女工哀史』や『野麦峠』などを見れば明らかである。この時期は、本物の惣村共同体がまだまだゆ

るぎないものとして存在し、多くの人々が精神的にはそこに帰属していた。だからこそ都市の工場の非人間的な環境にも、父母弟妹に少しでも楽をさせたい、故郷に錦を飾りたいといった動機によって、あるいは帰るべき「家郷」があるという安定感によって耐えることができた。

企業組織が機能集団から共同体的なものへと本格的に変化したのは戦後のことである（野口悠紀雄によれば戦時生産体制に起源があるというが）。この背景には、高度成長期に急速な都市への人口移動が起き、これによって、本物の惣村共同体の解体が進行したことがある。それと並行する現象として、日本の企業組織は共同体的な要素を色濃くしていた。この変化をもたらしたのは、つきつめれば、経済のパイの拡大期にあつて、人手不足感と人件費の先高感が常につきまといつたという事情である。成長期にある企業にとっては労働力の確保が優先順位の高い経営課題になる。高度成長期にはほとんどの企業がそういう状況にあつた。いきおい、新卒で採用し、そのまま定年まで勤務し続けてもらうことが経営にとって合理的となる。終身雇用制と年功賃金制はまさに、このためのシステムであつた。

したがって、バブルの崩壊を契機として、成長の頭打ち感が広まるや、直ちに日本的な拡大局面は、近代的な生産現場が、元禄・享保以来の日本的「場」の色彩をもち、そこから高い勤勉性を抽出することができたことに支えられた。しかし、そのようにして得られた豊かな社会は、単一の「場」に包み込まれることを「うつつうしい」と感じる感受性を浮上させ、また同時に、単一の「場」にしがみつかなくとも生きていけるという選択を招き寄せた。勤勉革命のメカニズムの②の条件、つまり「ムラの一人」という関係を離れては生き残さえず危うい」ということがリアリティーを失った以上、大企業の社員としてややこしい対人関係に巻き込まれるくらいなら、フリーターとして気ままなライフスタイルに生きようという選択も一定の合理性をもつわけだ。

4 「タテ社会」以後の日本社会

元禄・享保期以来およそ三百年ももち続けた社会の基本的なフォルムを今我々は更新しようとしている。おのずと、次の時代がどういうものなのか、関心がもたれる。占いをすることは別の機会にゆずり、ここでは今見えてくる現象について述べておこう。

先に述べたように、中根は欧米生まれの社会理論を日本にそのままあてはめ、はみ出した部分を日本の「後進性」とする議論を批判した。しかし、元禄・享保体制を卒業しつつある現在、中根の批判は結局的な外れだったのではないかとこの印象がある。

現代社会の特質は一言で要約するならば、「高度情報化社会」と「高度消費社会」ということにつきる。この種の社会を分析した論文が一九五〇年代のアメリカで盛んに書かれた。第二次大戦を国内的には無傷で経験したアメリカは、他の諸国より一足先に「現代」に突入したためだ。かつて、七十年代から八十年代にかけての時期にこの種の論文を読んだ時、日本の社会には適応することが難しいと感じた記憶がある。たとえばリースマンの『孤独な群衆』。企業サラリーマンの黄金時代であり、多くの人が「場」のシェルターに包み込まれていた日本では、「他者志向」の背景となるベリシックなところでの孤独感というものにリアリティーを感じることはできなかった。しかし、今『孤独な群衆』を読み返してみると、バブル崩壊後の日本の社会に非常にぴったりと符合する点が多いことに気づく。日本の七十年代、八十年代も、もちろん高度情報化社会であり、高度消費社会であつたわけだが、「場」という攪乱要因のために、その特性がそのままの形では現れにくかつたのではないか。そして今ようやく、元禄・享保体制を脱却して、五十年代のアメリカ社会に非常に近い特性を見せ始めたのではないか。

雇用慣行を見直し、リストラの嵐が吹き荒れ始めたのは当然のことである。成長が限界に達したとき、企業経営のベクトルは効率重視の方向を向く。これまでの、日本的経営なるもののほとんどが、成長期ゆえに合理性をもつもので、また成長期のゆとりと表裏一体のものであつた。効率重視となれば、異なる方針が合理性をもつ。

経営の面からだけでなく、我々の感受性も職場において家族的な「場」や、「気持ちのわりあい」を基礎とする日本的コミュニケーションのことも事実だ。世代間の感覚の差はあるものの、おおむね、胸襟を開きあつた関係よりは事務的な関係で十分という方向へシフトしつつある。職場における「場」の解体を突破口として、それ以外の様々な生活局面でも、我々はようやく元禄・享保以来のコミュニケーション・モードや対人関係を卒業しつつあるのだ。

自由だが少し不安でもある。「場」という居心地のよいシェルターから離脱しつつある我々の気持ちはそんなところだろうか。これは、結局のところ、我々の生活が豊かになり、単一の「場」にしがみつかなくとも生きていけるという実感が生まれたことによるのだろう。高度成長期からバブルの崩壊にいたるまでの、およそ半世紀にもわたる長い

「後進性」という言葉が含意するネガティブな視線には同意しないが、事柄の順序からすれば、五十年代のアメリカ社会の分析からはみだした部分は、結局のところ、日本の社会の「後進性」だったのではないかという印象が深い。

我々は今、元禄・享保体制以来の日本の社会のオペレーション・システムのヴァージョンを更新しようとしている。それは、「基本的には「高度情報化社会」と「高度消費社会」の特質がそのまま現れる社会ということになるだろう。